第４章　最近のウズベキスタンにおける国史編纂をめぐって
―「民族独立理念」のもとでの「ウズベク民族の国家史」―

帯谷知可

はじめに

ソ連解体以降、他の多くの地域と同様中央アジアでも、かつての民族共和国の主要民族を主体とする民族主義（ナショナリズム）[1]が、多かれ少なかれ、新しい独立国家の理念を支えてきたといえるだろう。ウズベキスタンも例外ではなく、むしろそうした傾向は非常に顕著である。そこでは「民族」と「国家」の枠組み自体は、基本的にはソ連時代の中央アジアの民族別国境画定(1924-25)によって成立したものであり[2]、すでに 75 年以上ゆるぎなく存在してきた。従って、この民族主義とは既存の「民族」と「国家」における既存の諸秩序を維持、強化するものとして機能する。

むろんこのような民族主義は独立以前のペレストロイカ期からすでに顕在化していたものである。が、独立後、ソ連という巨大な国家の解体によってソ連「国民」というカテゴリーは失われ、かつてのソ連国民はそれぞれの国のパスポートを持つ新独立国家の国民となったのであり、新しい独立国はそれぞれ「民族」意識と「国民」意識をより密着させる、あるいは「民族」意識を「国民」意識へと収斂させるという課題に、より現実的・具体的に取り組まねばならなくなったといえるだろう。その意味において、独立後のウズベキスタンに生じた国家主導のウズベク化推進のあらゆる側面とその思考・行動様式を仮にウズベキスタンの「新しい民族主義」と呼ぶことにしよう。

本稿では、その新しい民族主義の表れのひとつとしてウズベキスタンにおける国史編纂の問題を取り上げ、その 2001 年段階での成果を概観しておくことを目的とする。また、今後の議論の参考となることを期待して、やや長くなるが、1999 年に発表された新しい国史叙述のコンセプトの

---

[1] ナショナリズムは一般的にはもちろん「国民主義」「国家主義」などとも訳しうる。ネイションやナショナリズムをどう訳すか（どう解釈するか）については本研究会でもこれまでに一度ならず議論になった点であるが、ウズベキスタンなど旧ソ連中央アジア諸国の場合には、ウズベク人が「民族（ナーツィヤ)」として認定されることによってその領土的自治を実現する場として「ウズベキスタン」という国家（ソ連を構成する一民族共和国）が創設されたという背景と、ソ連時代には「ソ連国民」というソ連全体を覆う国民意識が存在したであろうことを考えると、さしあたり訳語としては、ネイションは「民族」、ナショナリズムは「民族主義」とするのが適切と思われる。ちなみに、現代ウズベク語では「民族」は millat（ロシア語の natsiia に対応)、「人民･国民･民族」は xalq（ロシア語の narod に対応)、さらに民主主義的な市民社会などという文脈での「市民･国民」は fuqaro という言葉が用いられるが、これらは厳密に定義されたり、使い分けられているわけではない。特に xalq は文脈によって明らかに「民族」である場合、「国民」である場合、「人民･国民･民族」のいずれとも受け取れる場合がある。

[2] 民族別国境画定については、Carlisle [1994: 103-26]、小松 [1996: 233-247]、また帯谷[1999: 222-227]、Obiya [2001]を参照されたい。

試訳を添付しておくこととする。

１．族独立理念と国史編纂

新しい民族主義は1990年代の半ば頃までは体系だったものではなかったが、次第にソ連時代の共産主義・社会主義イデオロギーが無くなった空白を埋める新しい国家イデオロギーとして明確に位置づけられるようになり[Karimov I. A. 1999]、ここ数年、それは特に「民族独立理念」(milliy istiqlol g'oyasi ウズベク語 / ideia natsional'noi nezavisimosti ロシア語、以下必要な場合には原則としてこの順序で原綴を付す)などの名称[3]で呼ばれるようになった。

この民族独立理念はいまだ優れて理論だったものにはなっていないが、2001年には民族独立理念は1冊の小冊子にまとめられるに至っている[*Milliy… 2001*]。それによれば、「我が民族(narod)の基本的な目標を表現し、その過去と未来を結びつけ、その幾世紀にも及ぶ希望と意志の達成に寄与する諸理念の体系」[op. cit: 42]と説明される。それは、公には、独立国家ウズベキスタンに不可欠な人民を統合するためのイデオロギーであり、祖国の繁栄、平和と安寧、人民の幸福、調和のとれた個人、社会の団結、民族間の協調、宗教的寛容が重要視される。そして、この理念を民主主義の諸原則と調和させつつ、自由な民主主義国家と市民社会を建設することがウズベキスタンの課題とされるのである。

一方で、この民族独立理念に関する様々な言説からは、ウズベク化と表裏一体であるところの脱ロシア・ソヴィエト化、中央アジアにおけるウズベキスタンの差異化・個別化、ウズベキスタンにとって「悪しきもの」を設定し、それによって危機感を高揚させ国家への求心力を求めようとする傾向、さらには時として自己犠牲的英雄主義や愛国主義の唱導といった側面があることも読みとることができるのである。

さて、ウズベキスタンにおいても歴史の見直しはペレストロイカをもって始まり、それまで封印されていた知られざる歴史、忘れられた歴史の掘り起こしに主眼が注がれた。そのプロセスにおいて「民族主義」が否定的なものから肯定的なものへと変化したことはいうまでもない。近現代史上の様々な人物や歴史的事件に対する評価はそれがいかにウズベク民族とウズベキスタンの利益に奉仕したかという観点から行われるようになった[4]。また、近現代以前の「遠い過去」は、民族のルーツの深さと歴史の偉大さ、そこに立ち現れる歴史的英雄たちの存在を強調し、それを継承するものとして現在のウズベク民族とウズベキスタンを位置づけ、独立後は特にその独立の正統性を主張するために、それは華々しく演出されてきた。1996年にその生誕660年が大規模に祝われたティムール朝の創設者、ティムールに対する評価にこうした傾向は最も顕著に表れてい

---

[3] その他、「独立イデオロギー」(istiqlol mafkurasi / ideologiia nezavisimosti)、「民族理念」(milliy g'oya / natsional'naia ideia)などの言葉がほぼ同義で用いられる。

[4] 例えば中央アジアのレーニンとも呼ばれたファイズッラ・ホジャエフに対する評価につき、帯谷[1999]を参照されたい。

る。

こうした文脈において、独立以降、国史編纂の問題は国家の要請としても非常に重要となった。周知のようにウズベキスタンでは大統領の発言がたいへん大きな力をもつが、民族独立理念を語るにあたり、カリモフ大統領は次のように述べている。「民族を敬うために必要なのは、その正史を研究し、保ち、敬うことである。…(中略)…我々の民族イデオロギーに力を与えることのできる、政治的・社会的・経済的・精神的起源を正しく解明せねばならない」[Karimov I. A. 1999]。正史として編纂される国史とは国家のイデオロギーを支えるために奉仕すべきものとして想定されていること、そしてソ連からの独立後もウズベキスタンにおいて歴史学はイデオロギーの呪縛からは解放されないことがここに端的に表れている。

もう一つ興味深いことは、ウズベキスタンにとって「悪しきもの」の中にパン・テュルク主義的歴史観があげられていることである[5]。大統領は「固有のウズベクという民族(natsiia uzbekov)はあたかも存在せず、共通の『テュルク民族 tiurkskii narod』が存在するのみ」と主張するというこの歴史観を「ウズベク民族(narod)の歴史を捏造し、様々な種類のエセ学問的解釈や政治的スローガンによって我々から栄光ある過去を奪おうとする傾向」と非難しつつ、「我々がテュルク語系諸民族と古代史上のルーツを同じくすることは認めよう…(中略)…しかし我々は常に自立した民族、すなわちウズベク民族であると感じてきたし、それを誇りに思っている。そして我々の歴史、科学、文化にはこのためのあらゆる根拠があるのだ」と述べている［op. cit.］。これが先に延べた、他のテュルク系諸民族や、隣接する旧ソ連中央アジアの「兄弟民族」からウズベク人とウズベキスタンを差異化・個別化しようとする傾向であり、ここで大統領のいうところの「根拠」の提示とその体系化こそが国史編纂に課せられた、困難な課題なのであった。

独立後、国史編纂の試みはいくつかあったが[久保 1993: 57]、例えばソ連時代に書かれた正史としての『ウズベク共和国史』1967 年版の改訂版と位置づけられる『ウズベキスタン史　*Istoriia Uzbekistana*』は、全 6 巻として計画されながらも 1993 年にシャイバーン朝期からロシアによる征服以前までの時期を扱った第3巻のみが出版されたに留まった[小松　1999: 36]。独立後の様々な混乱や財政的困難、ローマ字アルファベットへの移行問題などのほかに、ソ連史学の諸理論を脱構築し、新たな国史記述の理念を組み上げることの困難さもこの計画が遅々として進まなかったことの一因であっただろう。結局、国史編纂は次節にみる大臣会議令を契機として、急速に具体化されることになる。

[5] ちなみに、その他の「悪しきもの」として、政治化したイスラームと、かつてのソ連を想起させるような、ロシアを中心とする何らかの同盟・連合関係があげられている[Karimov I. A. 1999]

２．大臣会議決定「ウズベキスタン共和国歴史研究所の活動の発展について」とその成果

1998 年 7 月 27 日付大臣会議決定「ウズベキスタン共和国科学アカデミー歴史研究所の活動の発展について」[6]は、「ウズベク民族(o‘zbek xalqi)とその国家 (davlatchilik)の歴史の客観的研究の学術的基盤を形成し、研究を現代的要請にみあう水準に引き上げ、ウズベキスタンの歴史に関して能力ある成熟した歴史研究者養成の学術機関を形成し、われらが祖国の豊かで多様な歴史を復刻し、それを基盤に、わが民族の、とりわけ若い世代の思考における正しい歴史理解を促し、歴史的記憶への敬意を育成する」[*O‘zbekiston tarixi*, 1999(1): 15]ことを目的とする決定であり、国史編纂を担うべき科学アカデミー歴史研究所の再編成と、関係各方面への国史編纂のためにとるべき緊急方策を実現期限付きで命じたものであった。それはおおよそ以下のような内容である。

(1) 歴史研究所の活動の目的：ウズベク民族とその国家の正しい歴史の研究。国際的規模における学術的成果の公表。学術書・学術=一般書・教科書等の作成。歴史的知識の普及。歴史の分野で高度な専門性をもったカードルの養成。

(2) 研究所の再編成：研究所員総数を 100 名に増員。

(3) a. 研究所の基本的研究課題:ウズベキスタンの領域における最初の国家の基盤を成立させた歴史的諸条件および国家生成の問題の多角的研究と解明。ウズベク民族とその国家の歴史、ウズベク民族の起源(etnogenez)の研究と、この問題に関するあらゆる考古学的研究・文献資料研究の成果の収集、比較分析、総括。古代から現代に至るまで国家の歴史的諸段階においてウズベキスタンの領域に暮らした諸民族(xalqlar)の政治的・社会経済的・文化的・精神的生活の研究と、その成果に基く学術書・学術=一般書・教科書・歴史地図等の作成。古代から現代に至るウズベキスタンおよび諸外国のウズベク民族の歴史に関する研究に関する詳細な書誌編纂と史学史研究。

b. 研究所のその他の任務：一面的アプローチ、過去の捏造、植民地主義イデオロギーのドグマを許さず、古い思考様式を脱した、歴史研究の新しい継承者の育成。歴史を専門とする修士号取得者(magistr)の育成への積極的協力。諸外国の研究機関との協力と交流の促進。

(4) 上記に関連して、科学アカデミーのとるべき緊急方策：歴史研究所の新規定と職員定数表の作成・承認 (2 週間以内)。ウズベク民族とその国家の歴史に関するコンセプトの作成 (2 週間以内)。歴史研究所全研究員の勤務評定 (1 ヶ月以内)。科学アカデミーカラカルパキスタン支部、サマルカンド支部、ホラズム・マムン・アカデミーの学術的方向性の見直し (1 ヶ月以内)。歴史研究所構成員の補充 (1 ヶ月以内)。6 ヶ月ごとの「ウズベク民族の国家の歴史」共和国学術

[6] テキストは次による。*O‘zbekiston tarixi*, No. 1, 1999, pp. 15-17. なお、この決定については小松[1999: 35-36]にもかなり詳細な言及がある。

セミナーの開催。国内の学術・教育機関の協力関係強化。祖国の歴史の現代的諸問題を扱う定期的論集ならびに学術雑誌『ウズベキスタン史』の組織(1ヶ月以内)、ならびに学術=一般向け歴史小冊子シリーズ刊行の検討。歴史研究所への近代的設備の供給。

(5) 文化省：共和国内のすべての歴史博物館の学術研究業務を歴史研究所の活動に一致させるインストラクションの作成(1ヶ月以内)。

(6) 高等中等特別教育省：タシュケント国立大学、タシュケント国立教育大学、タシュケント国立東洋学大学その他の歴史学部においてカードル養成のカリキュラムとインストラクションの見直し、再編成（1998年9月1日期限)。

(7) ウズベキスタン共和国国民(xalq)教育省：ブハラ、ウルゲンチ、タシュケント各市において歴史学に特化された特別初等学校を組織（1998年度中)。

(8) その他:科学アカデミー、高等中等特別教育省、国民教育省は国家出版委員会との協力のもと、ウズベク民族とその国家の歴史に関する教科書・学習教材のためのインストラクションを作成、実行(2ヶ月以内)。高等学位資格認定委員会はウズベク民族の歴史に対する要求度を強化。国家保安部、大統領府文書館、第一文書館、歴史研究所は歴史研究者に必要な史資料を提供。財務省、科学技術国家委員会は、歴史研究所の新体制を可能にする財政的支援、物品・技術提供を行い、科学アカデミーの予算により歴史研究者の海外調査ならびに海外に存在する史資料収集・購入のため1999年以降予算措置を実現。歴史研究所の1998年中の学術研究業務の費用は科学技術国家委員会の予備予算を充当。

この大臣会議決定はその遂行に財政的保障が与えられている一方、かなりの強制力を伴ったものと思われるが、すでに1998年中からその成果は現れ始め、そして2001年の独立10周年をひとつの目標として実際に国史として書かれたものが世に出るようになった。管見の限りでは、具体的成果として刊行されたものに、学術雑誌『ウズベキスタン史 *O'zbekiston tarixi*』の刊行(1999-、年4回)、歴史地図 *O'zbekiston*…[1999]、歴史小冊子シリーズ 「ウズベキスタン史の新ページ」としていずれも歴史研究所スタッフにより近現代史の諸テーマを扱った Alimova [2000]、Germanov [2000]、Karimov E. E. [2000]、Rajabov [2000]、Ziyoeva [2000]、新しいコンセプトによる学術=一般書の試みとして、古代を扱ったRtveladze *et al.* [2001; ロシア語版2000]、近現代を扱った全3巻の通史 *O'zbekistonning*…[2000a; 2000b; 2000c] があげられる。

３．新しい国史のコンセプト「ウズベク民族の国家史」

国史編纂をめぐる一連の動きの中で、最も注目すべきは国史記述を貫く理念が雑誌『ウズベキスタン史』創刊号において示されたことだろう。本稿に資料として添付した「ウズベク民族の国家史のコンセプト」がそれである。その主な特徴であると思われる3点を以下に見てみよう。

(1) 継承される「アフトフトンノスチ」重視の民族史記述

ソ連時代､正史としてのウズベキスタン共和国史が 1940 年代から形成された民族起源論を軸に、「アフトフトンノスチ　avtokhtonnost'（原住性、自生性)」を重視した民族史として描かれていたとすれば[宇山 1999: 104-108]、現在の新しい国史のコンセプトにもその立場は明確に継承されているといえる。まず、ウズベキスタンの歴史はウズベク民族(o'zbek xalqi)の歴史として記述される。そしてこのウズベク民族の起源は、「ウズベク」という、13-14 世紀頃キプチャク･ハーン国の遊牧民たちの間で使われ始めたとされる民族名称にはこだわらずに、ウズベク民族を基本的に「アム川とシル川の間の地域（マーワラーアンナフル）で人工的灌漑農業に従事した定住民」と定義づけ、現在のウズベキスタンの領域でその定住民の遺構を可能な限り古く溯り、考古学的に立証することによって求められて行くのである。従って、ウズベク民族は古代から現代に至るまで連綿と存在してきた。この文脈では、民族と国家の形成という意味で 1924-25 年のソ連体制下における民族別国境画定がことさら強調されるということはない[7]。

(2)「国家（体）davlatchilik / gosudarstvennost'」

ソ連時代の民族史記述を受け継ぎながらも、新しい要素として出てきたのがおそらくウズベク民族の歴史を「国家」史という立場から描くという点であろう。ただし添付のコンセプトにおいてもこれについては十分に説明されていないので、ここで詳しく解説することは難しい。基本的には「国家（体）davlatchilik / gosudarstvennost'」という概念に着目して、上に述べたウズベク民族の歴史を古代から現代にいたるまで記述するということである。現在のウズベキスタンの領域に歴史上存在した様々な王朝や国家はすべてこの「国家（体)」という概念に包摂され、そこに現れた様々な名称や諸王朝の交代はウズベク民族の国家の歴史の諸段階とされる。例えばティムール朝期はウズベク民族の国家のいわば歴史的最盛期であり、その後ウズベクという民族名称がもたらされたウズベク諸ハーン国時代はウズベク民族の国家の政治的凋落期と性格づけられている。おそらくは発展段階論的な考え方を援用して、それが現在の独立したウズベキスタンへと発展していくことを歴史の必然と捉える見方であろうと思われる。ウズベク民族の最初の国家の解明が求められているのも、この国家（体）がソ連時代の民族起源論におけるロシア語のナロードノスチ narodnost'（民族体）　がゴスダールストヴェンノスチ gosudarstvennost'（国家体）にかわったものと捉えるならば、民族史において民族の起源が重要であったのと同様に、国家の起源が重要視されるからである。またそこには民族や国家の起源は古ければ古いほど誇らしいという心理も働いていることは明らかだろう。

---

[7] 新しい国史においては、中央アジアの民族別国境画定はボリシェヴィズムによって強制的に押し付けられたもので、テュルキズム（ここではトルキスタン主義を指すものと思われる：筆者）を希求した当時の中央アジアの利害に反するものだったことを強調している。その結果形成された「民族」は真のものではなく、「民族疑似体 milliy o'xshash tuzilmalar」にすぎなかった、従ってその民族疑似体を主体とする国家を「民族国家」と評価することは正しくないとされている[*O'zbekistonning*... 2000b: 282-302]。

(3) 植民地期の設定

時代区分を見てただちに気がつくことは、ロシア革命が時代を画するできごとではなくなったことである。いうまでもなく、ソヴィエト史学においてロシア革命という事実とその理念の正当化がある種絶対的な課題であり、共和国史においても革命史研究はその中心を成すものであった。例えば、帝政ロシアによる中央アジア征服の問題は、のちに中央アジアがロシア革命を経験し、またソヴィエト化・社会主義化するための諸条件を中央アジアに与えたがゆえに、「進歩的」であったと評価された。しかし、添付のコンセプトにおいて明らかなように、帝政ロシア支配期とソヴィエト期（ペレストロイカ開始前まで）は一括して「植民地期」として扱われている[8]。ここでは、ロシア革命とは新たな「赤い帝国」の始まりを告げるものに他ならない。革命期の歴史は、それに抵抗して中央アジアの人々がいかに自己犠牲的・英雄的に闘い、それがいかにソヴィエト政権によって苛酷に不当につぶされていったかを語ることで描かれる。この時代に「反革命」の烙印を押された人々は、「独立」のために戦った勇者たちであり、彼らが追い求めた「独立」は長いソ連支配の後ついに 1991 年に達成された、となる。こうしてみると、ウズベキスタンの独立という事実とその正当化がロシア革命にかわって歴史叙述の「原点」となったのであり、歴史は常にその「原点」を向きながら語られて行くのである。

おわりに

以上、ウズベキスタンにおける独立後の国史編纂の動きを概観してきた。国家の強い要請と指令によって新しい国史編纂は進められているが、それは現在の新しい民族主義の要請に応える一方で、実はソ連時代の学術的成果や知的遺産にも多くを負っている。ペレストロイカ時代に始まった歴史の見直しも、ソ連時代にタブーであったテーマの掘り起こしと評価の逆転という点では画期的なものであったが、歴史観そのもの、あるいは「民族」や「国家」の枠組みや定義をあらためて問い直し、ソ連時代の諸理論を脱構築するところまでは行き着かなかった。権威主義体制の強化によって、新しい民族主義が国家イデオロギーとして明確に位置づけられていく中で、既存の「民族」と「国家」はすでに自明の存在であることが前提なのであり、これらの枠組みや定義をあらためて問い直すことが今度はかえってタブーになりつつあるようである。

偉大な歴史と伝統をもつ偉大な民族というイメージは、書かれた歴史の中だけでなく、独立記念日（9 月 1 日）や古イラン歴の新年ナウルーズ（3 月 21 日）の祝典コンサート、あるいは祖国を題材とする歌謡曲などを通じて、「共通の記憶」としてますます増幅されていく傾向にある。学術的な通史の登場も待たれるところであるが、これら「共通の記憶」を作り上げる様々な装置を

[8] *O'zbekistonning...* [2000a; 2000b]では、植民地期をツァーリ・ロシア植民地主義時代、ソヴィエト植民地主義時代に分け、それぞれ 1 巻をあてている。

も視野に入れながら、ウズベキスタンの新しい民族主義についてさらに考察を進めたいと考えている。

また、およそ「国史」と呼ばれるものすべてが抱えてしまうジレンマや危うさを、ウズベキスタンの国史もそれが国史である以上、免れることはできないわけであるが、そうした点では、ここで取り上げたウズベキスタンの国史編纂の動向は歴史家の倫理の問題などをも含む、いわゆるナショナル・ヒストリー論の方向にも展開しうるかもしれない。その場合には比較研究の立場からアプローチするのが有効であろう。

＜参考文献＞

ウズベキスタンの新しい国史に関するもの

Alimova, D.

2000 *Dzhadidizm v Srednei Azii. Puti obnovleniia, reformy, bor'ba za nezavisimost'* (Novye stranitsy istorii Uzbekistana), Tashkent: O'zbekiston.

Germanov, V. A.

2000 *Istoriki Turkestana v usloviiakh politicheskogo terrora 20-30-kh godov* (Novye stranitsy istorii Uzbekistana), Tashkent: O'zbekiston.

Karimov, E. E.

2000 *Iasaviia i Khodzhagan Nakshbandiia: istoriia deistvitel'naia i vymyshlennaia* (Novye stranitsy istorii Uzbekistana), Tashkent: O'zbekiston.

O'zbekiston...

1999 *O'zbekiston tarixi atlasi,* Toshkent: O'zbekiston Respublikasi vasirlar mahkamasi huzuridagi geologiya, kartografiya va davlat kadastri bosh boshqarmasi.

O'zbekistonning...

2000a *O'zbekistonning yangi tarixi. 1 kitob. Turkiston chor Rossiyasi mustamlakachiligi davrida*, Toshkent: Sharq.

2000b *O'zbekistonning yangi tarixi. 2 kitob. O'zbekiston sovet mustamlakachiligi davrida*, Toshkent: Sharq.

2000c *O'zbekistonning yangi tarixi. 3 kitob. Mustaqil O'zbekiston tarixi*, Toshkent: Sharq.

Rajabov, Q. K.

2000 *Mustaqil Turkiston fikri uchun mujodalalar* (O'zbekiston tarixining yangi sahifalari), Toshkent: O'zbekiston.

Rtveladze, E. V., Saidov, A. X. Abdullaev, E. V.

2001 *Qadimgi O'zbekiston tsivilizatsiyasi: davlatchilik va huquq tarixidan lavhalar*, Toshkent: Adolat. (ロシア語版 Rtveladze, E. V., Saidov, A. Kh. Abdullaev, E. V, *Ocherki*

po istorii tsivilizatsii drevnego Uzbekistana: gosudarstvennost' i pravo, Tashkent: Adolat, 2000.)

Ziyoeva, D. X.

2000 *Bosmachilik: haqiqat va uydirma* (O'zbekiston tarixining yangi sahifalari), Toshkent: O'zbekiston.

雑誌 *O'zbekiston tarixi* (1999～)

その他

Carlisle, D. S.

1994 "Soviet Uzbekistan: Staten and Nation in Historical Perspective," in *Central Asia in Historical Perspective,* ed. B. F. Manz, Boulder-San Francisco-Oxford: Westview Press.

Istoriia…

1993 *Istoriia Uzbekistana*, Tom 3 (XVI-pervaia polovina XIX veka), Tashkent: Fan.

Karimov, I. A.

1999 "Svoe budushchee my stroim svoimi rukami," *Pravda vostoka*, 06.02.

久保一之

1993 「ウズベキスタンにおける中央アジア史研究の現状」『西南アジア研究』No. 39, pp. 50-61.

小松久男

1996 『革命の中央アジア』東京大学出版会、1996.

1999 「新たな船出―タシュケント訪問記」『史学雑誌』108(3), pp. 35-37.

Milliy…

2001 *Milliy istiqlol g'oyasi: asosiy tushuncha va tamoyillar*, Toshkent: O'zbekiston. (ロシア語版 *Ideia natsional'noi nezavisimosti: osnovnye poniatiia i printsipy*, Tashkent: O'zbekiston, 2001.)

帯谷知可[Obiya, C.]

1999 「ファイズッラ・ホジャエフとその時代」『岩波講座世界歴史23 アジアとヨーロッパ1900年代-20年代』岩波書店、pp. 207-230.

2000 "Faizulla Khojaev Decided to be an Uzbek," in *Islam and Politics in Russia and Central Asia (Early Eighteenth to Late Twentieth Centuries)*, ed. S. A. Dudoignon and H. Komatsu, London-NewYork-Bahrain: Kegan Paul, pp. 99-118.

宇山智彦

1999 「カザフ民族史再考―歴史記述の問題によせて」『地域研究論集』2(1), pp. 85-116.

＜資料＞「ウズベク民族の国家史のコンセプト」（試訳）

このコンセプトは、ウズベク民族の国家の歴史の客観的研究の学術的方法論を形成し、それを基にウズベク民族とその国家の正しい歴史を構築し、われらが民族における、とりわけ若い世代における歴史観と歴史的記憶への敬意を育成することに向けられたものである。

コンセプトを支える基本的な学術的理念とは以下のごとくである。

―ウズベク民族の国家の歴史は、定住の人工的灌漑農業生産を行う土地において青銅器時代にすでにアム川とシル川の間の地域で生じ始めた。それは次第に発展し、紀元前 1 千年紀の初めには顕著ないくつかの国家組識として発達していた。

―ウズベク民族の国家の歴史はほとんど 3 千年来、全世界の歴史ならびに人類社会の発展のわかちがたい一部となってきた。様々な名称や、諸王朝の交代といった要因はウズベクの国家の歴史の諸段階であり、その一体性と基本的な本質を変化させるものではない。

―ウズベク民族とはウズベキスタンの土着の先住民(mahalliy tub aholisi)であり、その人類学的には、中央アジアーフェルガナ・タイプの諸特徴が顕著である。ウズベク民族の歴史はアム川とシル川の間の地域において古代のあらゆる時代において生じた民族的(etnik)文化的プロセスによって有機的に結びついていた。

―ウズベキスタンの領域の文明は中央アジア諸民族の歴史的文化的発展の不可分の一部として何千年もの間、世界の先進文明とともにあらゆる関係において発展し、また人類文明の進歩に多大な影響を与えた。こうした地位は全世界の文明の発展に貢献する優れた諸理念を向上させ、維持し、世界に普及させる役割を演じてきた。

―コンセプトの史料学的および史学史的基礎を大規模遺跡や書かれた遺産と総合し、そして世界の歴史学を完成させるような客観的結論を出す。

<u>コンセプトの目的と課題</u>

ウズベキスタンでは、民主的法治国家建設の過程において、過去の歴史的経験がウズベク民族の古代における国家の様々な伝統を比較できない状態にしていることは、ウズベキスタン共和国大統領 I. A. カリモフの著作に反映されている通りである。それゆえ、本コンセプトにおける独立のイデオロギーと民族的アイデンティティ(milliy o‘zlik)の分かちがたい一部として、ウズベクの国家の客観的な正しい歴史を構築するという目的が与えられた。この目的の実現のためには以下の課題を遂行せねばならない。

―ウズベキスタンにおける最初の都市建設文化の形成および最も古い時代の国家生成における古代定住民文化を解明する要因の存在を示すこと。

―紀元前 9－8 世紀および 7－6 世紀における最初の我々の国家の発展段階を深く一貫性をもって研究すること。

―アケメネス朝の侵攻、アレクサンドロス大王とその継承者たちの時代におけるわが国の古代国家

復興のための戦いの本質を解明すること。クシャン朝時代の歴史をウズベクの国家の歴史に基いて深く研究すること。

—シルクロードの出現、およびそれが内部的対外的通商、経済的文化的諸関係において占めた位置を明らかにすること。

—初期の、また最盛期の中世におけるウズベク国家のあらゆる段階の歴史を体系的に研究し、その世界文明の発展に対する貢献度を研究すること。

—14 世紀後半および 15 世紀に中央集権化されたウズベクの国家の発展の独自の法則性と特徴、ならびにアミール・ティムールが傑出した国家指導者として、また文化と学問の擁護者として世界史上で占める位置を深く明らかにすること。

—16-19 世紀前半におけるウズベクの国家の独自の特徴、政治的混乱という条件下における統治システムの欠陥、文化・学問・文学の諸分野における凋落の兆しを研究すること。

—ウズベク民族のツァーリ・ロシアの植民地主義およびソヴィエト専制国家(istibdod davri)における経済的・社会的・文化的・精神的状況を客観的に評価すること。

—ウズベクの国家の歴史において独立達成後の最も新しい時代をあらゆる側面から広く明らかにすること。

<u>コンセプトの理念的基盤</u>

—ウズベキスタンの領域における先住民(tub aholi)とその子孫たちは何千年にもわたって定住生活を送ってきたこと、また土着(mahalliy)文化は古代における豊かな根であり、過去であること。

—ウズベキスタンで国家が生じ、ウズベク民族が形成された過程において先住定住農民が占めた位置。今日のウズベク民族は歴史的にこの地に暮らしてきた民族の系譜を継ぐものであり、この地で形成された生活様式と文化の完全な(to‘laqonli)継承者であったこと。

—ウズベキスタンにおける国家の誕生においては、紀元前 3-2 千年紀に形成された人工的灌漑に基く農業経営、家内工業、物々交換が基本的な要因であったこと。

—ウズベキスタンの国家の形成と発展における、初期の諸都市の重要性。

—ウズベキスタンの国家の形成と発展過程において、先住民の慣習、伝統および精神性、古代における社会性は統合の要因であったこと。

—ウズベキスタンの初期国家の歴史は、地理的な境界という意味においては、今日のウズベキスタンのみならず中央アジア全体の規模で、古代における文化的・経済的・政治的プロセスをカバーする政治的社会的な現象という形において論じる必要があること。

—ウズベキスタンにおける国家の形成と漸次的発展、独自の諸特徴と法則性、世界文明の発展と世界の諸民族の歴史においてそれが占める位置。

<u>ウズベキスタンの歴史において特に注目すべき時代</u>

1．　ウズベキスタンにおいて国家が生じた時代（紀元前 2 千年紀中葉および後半）

２．　初期の国家連合体（紀元前１千年紀前半）
３．　古代の国家の歴史（紀元前４世紀末から紀元４世紀）
４．　初期中世の国家の歴史（5-8 世紀中葉）
５．　最盛期中世の国家（9-13 世紀初頭）
６．　アミール・ティムールとティムール朝時代（14 世紀後半-16 世紀初頭）
７．　16-19 世紀初頭の国家の歴史
８．　19 世紀後半および 20 世紀の植民地時代のウズベキスタン
９．　数千年にわたるウズベクの国家の継続・継承者としての独立ウズベキスタン国家

コンセプトの内容の基本的方向

―ウズベキスタンは世界文明の根源の地のひとつであること。ウズベク民族が世界歴史・文化の発展において占める位置。古代における社会的・経済的・文化的・政治的プロセスの研究における考古学および史料の重要性。初期の諸史料に見る古代ウズベキスタン。歴史的文献としての『アヴェスタ』。

―最初の国家が形成された時期。紀元前 1500 - 1000 年。国家の形成における生産経済の重要性。人工的灌漑に基く農業、宿駅、建築。家内工業、商業、文化関係、定住農耕民と牧畜民(chorvador aholi)の相互関係。

―紀元前 9-8 世紀。民族的(etnik)文化的プロセス。『アヴェスタ』における軍事的政治的システムに関する情報。考古学的研究の諸成果。

―紀元前 7-6 世紀においてウズベキスタンの領域における最初の国家の出現。歴史地理学。歴史・文化的側面。国家の発展において定住農耕民の成した貢献。古代の諸部族(qabilalar)と諸民族(xalqlar)。物質・精神文化。文化的諸関係。

ウズベク国家の諸段階

―古代ホラズム。バクトリア。ソグド。ウズベキスタンの領域における最も古い諸都市の発展。

―アケメネス朝の進撃者たちに対する戦い。アケメネス朝国家の一部としてのウズベキスタン諸州。アケメネス朝国家の最期。

―アレクサンドロス大王の到来。侵攻者たちに対する戦い。古代ギリシャ人政権の確立。統治システム。社会経済生活。

―セレウコス朝。独立への志向。古代グレコ・バクトリア国家。政治的・経済的・社会的・文化的プロセス。

―月氏。古代グレコ・バクトリア王国の最期。クシャーン朝。統治システムと行政機構。国内情勢と対外関係。経済と文化。宗教と信仰。文字による遺産。

―紀元前 6 世紀から紀元 4 世紀初頭までのホラズム。史料に基いた文化・経済・社会生活の分析。

―アフリギー朝。ホラズムがウズベクの国家の歴史において占める位置とその重要性。

―康居および大宛（フェルガナ）　国家の時代。

—ソグドと国際通商。ウズベキスタンに相当する地理的範囲に相当。シルク・ロード。東西諸国家の相互に影響しあうプロセス。

—ササーン朝と中央アジアの関係。ヒオン、キダーラ。エフタルとサーサーン朝。エフタルの国家。国内システム、社会経済的諸関係、文化。

—土着の諸民族と突厥国家。民族的プロセス。統治システム。社会経済的諸関係。文化的プロセス。

—ウズベキスタンの領域におけるアラブによる征服の時代。征服に対する戦い。カリフ政権の確立。新しい統治システム。イスラームの信仰の広まり。

—9-13 世紀初頭におけるウズベクの国家制の歴史におけるターヒル朝、サーマーン朝、カラ・ハーン朝、セルジューク朝、ホラズムシャー朝。彼らの統治システム、国内および対外政治。経済的社会的諸関係。税システム。法。文化的精神的生活。イスラーム法学。

—モンゴルによる圧政の時代。自由のための戦い。チャガタイ・ハーン国。統治システム。経済的・社会的・文化歴史的状況。サルバダール朝の反乱と民族の自由(xalqning ozodlik)のための戦い。モンゴル支配の終焉。

—アミール・ティムールの国家建設。14 世紀後半における中央アジアの社会経済的および政治的状況。アミール・ティムールの権力掌握と中央集権国家の形成。社会経済的諸関係。税システム。法。外交関係と通商。科学、文化、文芸の発展。アミール・ティムールが世界史において占める位置。ティムール朝時代におけるマーワラーアンナフルとホラーサーン。シャールフとウルグベク。

—シャイバーン朝、アシュタルハーン朝、マンギット朝。ウズベクの国家の政治的凋落期としての中央アジアにおけるブハラ、ヒヴァ、コーカンドの 3 ハーン国。それらにおける統治システムの独自の特徴。社会経済的諸関係。税制。国家における法の基盤。国際的通商と外交関係の発展。科学、教育、芸術、文化。文学と年代記の作成。

—ツァーリ・ロシアの中央アジア侵略。植民地主義的統治システムの確立。ブハラおよびヒヴァ両ハーン国に適用されたロシアの保護国というステータスの本質。民族解放(milliy ozodlik uchun)闘争。人民反乱(xalq qo‘zg‘olonlari)。ジャディード運動。

—トルキスタンにおけるソヴィエトの圧政の確立

—トルキスタンにおける自由と独立のための戦い。トルキスタン政府。その終焉の理由。ブハラ・アミール国[=ハーン国]およびヒヴァ・ハーン国の最期と「人民共和国」の形成。ソヴィエトの「民族政策」。独立主義者の運動(istiqlolchilik harakati)[=バスマチ運動：筆者注]とその敗北の理由。

—「民族別国境画定」の政治的重要性。全体主義体制の確立。工業化、土地水利改革、文化革命およびそれらの結果。ソヴィエトの恐怖政治(qatag‘on siyosati)の犠牲者たち。第二次世界大戦下のウズベキスタン。50-80 年代の政治的・社会経済的生活、科学と文化。行政的官僚主義システムの強化。ソヴィエト政権・ソ連の終焉。

—ウズベクの国家の歴史において最も新しい時代。独立ウズベキスタン国家の形成。ウズベキスタン独自の独立と発展の道。ウズベキスタン共和国憲法の採択とその歴史的重要性。ウズベキスタンにおける法治主義的・民主主義的国民(fuqarolik)国家の基盤形成。改革と革新。社会経済的発展。国民

教育(xalq ta'limi)、科学、文化。精神性と啓蒙、民族的宗教的伝統、進歩的慣習と精神的価値観の形成。世界のあらゆる社会とウズベキスタンとの調和。

［*O'zbekiston tarixi*, 1999 (1): 31-34］